名古屋医学部医学科 4 年
072100722
松陰寛

サマープログラムを通しての学び

1 週間にわたるアメリカの 3 大学と北京大学からの留学生との交流を通じて、老年内科、地域医療、在宅医療について多くを学ぶことができました。特に在宅医療では、末期がん患者をはじめとする終末期医療に焦点を当てた学びが印象的でした。この経験は、医療の現場で多くの高齢者がどのようなケアを必要としているのか、また在宅医療が果たす重要な役割について深く考える機会となりました。

老年内科の講義では、高齢者特有の疾患や症状に関する知識が得られ、特に認知症やフレイルといった問題がどのように患者の生活に影響を与えるかについて学びました。となっていることを実感しました。

地域医療の講義では、実際に市橋先生のクリニックでの活動を見て、医療提供の場が病院に限らず、地域社会全体で支えるべきものであるという考え方を学びました。地域に根差した医療の提供は、病院から遠く離れた場所に住む高齢者にとっては特に重要です。各地域の医療資源を最大限に活用しながら、住民一人ひとりに合わせた医療を提供することの重要性が強調されていました。また特に終末期医療に対する関心が深まりました。末期がん患者に対するケアの実際を学ぶ中で、患者ができる限り自宅で穏やかに過ごすために医療者がどのようにサポートするかが大切だと感じました。医療技術の進歩によって、在宅で行える医療の範囲が広がっていますが、患者の心理的なケアや家族の負担軽減も重要な課題として浮き彫りになりました。講義を通じて、医療者としての役割は、単なる医療行為にとどまらず、患者の生活全体をサポートすることにあると再認識しました。

最後に、異文化交流という観点では、アメリカの大学と北京大学の留学生たちと多くの意見交換をすることができました。特にアメリカと中国では医療制度や終末期医療に対する考え方が異なり、それぞれの国が抱える課題や取り組みについて学ぶことができました。例えば、アメリカではホスピスケアが充実している一方で、費用の問題が大きな課題として挙げられていました。一方、中国では高齢者医療の需要が急増しており、今後の医療提供体制の強化が求められています。こうした異なる背景を持つ学生たちと議論する中で、自国の医療制度についての理解も深まりました。

この 1 週間の交流を通じて、異なる文化や医療システムの中で生きる人々と意見を交わすことが、将来の医療に対する視野を広げる重要な機会であると感じました。また、医療者として、文化的な違いを理解しながら、患者一人ひとりに適切なケアを提供することの大切さを学びました。この経験は、今後の医療現場での実践に大いに役立つと確信しています。

まちごとシェアオフィス
WASITA
MINO